

編集後記

編集長(ダン シロウ)

今号の編集では、議論すべきことがあった。マガジンへの連載は基本的に、学会員である方の希望によっている。学術誌ではないので、査読したり、内容について編集部が口出ししたりすることは原則的にない。自由に書いてもらえたらと思っている。しかしそのことと、何でもそのまま掲載しますというのでは当然違う。もしそうなら編集者は要らない。

執筆者の見解の多様性は尊重したい。対人援助を限られた立場や角度からしか見ない、扱わないのは世界を狭く想定してしまうことになると思う。対人援助には、援助する側もあれば、される側、その狭間にいる側が存在して当然だ。それぞれが抱える考え方も経験も様々だろう。

だから客観的事実の記述という基本スタンス以外にも、体験という主観に基づく記述も、マガジン執筆の範疇に含まれていて良いと思う。

基本のところ大切にしたいのは、記述されたものが読者に伝わること、著者の見解が読者に届く(内容の賛同ではなく、別の見解として了解可能)ように書かれていることである。

七年目28号を終えようとする継続発行のマガジンにおいて、結果的にはあったが、ここまでの執筆者の九割を編集長自身が個人的に存じ上げていた。編集員二名が知っている人を併せると100%になる。そういう方針だったわけではなく、小さな学会であるから、ある意味必然だった。

だからといって、知り合い同士で作っているマガジンの意識はさらさらなく、執筆者が行っている仕事や実践について、編集者が関心を持ち、承知していることを表していた。

だがそれは一方で、やはり閉ざしているところも含まれていることを否定できない。今回、縁あって、全く未知の会員からの投稿を掲載することになった。掲載されているものがすべてなので、経過について特

に書かねばならない事はない。

ただ、連載決定までには、内容ではなく、記述の形式について、編集者の意見を色々と申し上げ、やりとりすることになった。

対人援助学マガジンは、個人のホームページやブログ、Twitter、Facebookとは異なる。ウェブ版ではあるが、学会ニュースレター位置付けの「連載専門誌」という学会員が執筆する定期刊行物である。読者は学会員のみには制限していないことなど、当初からデザインしてきたことを共有するために、編集者として再考するのに良い機会になった。

編集会議でも議論したり、編集長としてもいろいろ思うことが多かった。読者の方々にも、考えていただく良い機会ではないかと思う。

こういう刊行物は生き物である。常に変化をしながら発展し、時には形を変えていく。マガジン(雑誌)なのでそれほど四角四面に考えていただく必要はなく、知的好奇心の展開として、いろいろ思うところを投げ掛けていただけるとありがたい。

編集員(チバ アキオ)

★「農地解放のおかげで地主様のということならどんなことでもご無理ごもつとも承わらなくては次の年から小作ができぬということもなくなった。地主様と同じような立派な婚礼も出せるようになった。農地解放によって農村は確かに『民主化』された。だがその一方、農地解放は農村に新しい困乱を巻き起こした。(中略)大地主から水飲み百姓までに至るまでの社会的、経済的序列があった。(中略)その序列が急に変わった、しかも外部の力によって変えられたのである。(中略)耕地の大小よりも何俵供出できるか、供出能力が富の尺度である。(中略)農地解放によって、ともかく富の公平化に進んだ農村は、その後十年再び大農と零細農の差が大きくなる様相を見せている」

★農地解放はGHQの農地改革によって戦後行われた。上記はその10年後の秋田県の小友村(現大曲市)の一年の風俗を収めた『村の一年 —秋田— 1956』(岩波写真文庫)の記述である。封建的な古い農村の解放が日本の過去のよくない状況から脱却できると、ある立場から判断され、農地改革は実施された。既存の社会構造への変化を求めたのである。そ

れまでも、この封建的な構造に対して、それが行き過ぎることがないように選挙活動や社会運動などが行われてきた。そんな動きとも『対人援助学マガジン』を重ねている。

★学歴、脳のスペック、経済力、人生のめぐりあわせ等様々な条件が整った人だけが学会やこのような発信の機会に恵まれ続ける。そんな社会構造が維持されることは、また以前の農村と同じような序列や役割の固定化を引き起こす。条件を問はずることなく、入会、活動、執筆ができるこの対人援助学会、特に『対人援助学マガジン』は時代の社会構造へのチャレンジともいえる。

★一介の福祉施設の職員が、こうして多くの人が見たり読んだりできるところで発信し続けること自体が、よく考えるとそれまで社会にそうあったことではない。障害者福祉の領域に殺傷事件や虐待事件でしか触れることがないことはあまりにも偏っている。日常があることを見てほしい。非日常を伝えるのがニュースであるならば、日常を伝えるのも『対人援助学マガジン』の機能の一つである。

編集員(オオタニ タカシ)

お笑い芸人キングコングの西野氏が著者の絵本「えんとつ町のプペル」が、全編無料で Web に公開されたことが話題になった。西野氏が述べていた「お金は幸せになるための道具なのに、それに制約されることの矛盾」と「それから独立するための無料公開」には多いに共感するところがあった。

一方で、本人がこう述べていても、「ほかの絵本作家の迷惑」「却って本が売れる、うまい販売戦略」などの声が飛び交い、世の中の認識とか度量とかが乏しくなっていることがひしひしと感じられて気がめいるような思いにもなった。

同じ時期に、防衛省の研究費が増額され、科学研究の意義と研究費の枯渇という現実の間で、葛藤する研究者の姿もみた。苦肉の策、と言いながら、研究費に応募した研究者、その判断は本当に正しいのだろうか。クラウドファンディングでの資金調達から、じわじわと広がりを見せ、従来の映画とは違う形でヒット作となり話題になった「この世界の片隅に」。

今の社会にとって本当に必要なことであるのなら

ば、「お金」に制約されなくてもきっと何か成す術はある。小さくとも、そんなことを1つでも重ねていくことができればと思う。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻28号

第7巻 第四号

2017年03月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第28号は2017年06月15日
発刊の予定です。

原稿締切2017年5月25日！

常に新規執筆者を求めていますし、お誘いすることもありますが、執筆依頼はしていません。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の専門分野の今日記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌ですが必ず何回以上と決めているわけではありません。必要な回数(ずっと・・・というのもあります。多くの方達が連載7年目を迎えています)を、書いていただけるよう設定します。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。したがって書いていただく方には、対人援助学会への入会をお願いします。まだ登場していない、対人援助領域からの積極的参加を求めます。

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1

立命館大学大学院応用人間科学研究科内

TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通 2-4-1

リファレンス内

TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

意図があって描くことももちろんある。でも、いつもいつもそんな思いで描いているわけでもない。何だかチョット描いてみたかったとか、こういう色合いにしたら、良いかなとおもったので…なんて仕上げもある。

三月中旬に開催する「ぼむ」マンガ展の制作と、マガジンの編集作業が同時並行だった。だから描くこと、作品に仕上げることについて、あれこれ考えた。普段、あまりそんなことを考えない質なので良い機会だった。

そして、五〇年近くもヒトコマ漫画を描いてきて、今頃になって、結局ヒトコママンガには力がなかったから寂れてしまったのかもしれないと思うようになった。

ここで、自分が未熟なだけかもしれないとか、私が下手なことを棚に上げて書くのも僭越だが・・・等と、行儀の良さそうなことは書かない。そういう言い方で現実を見つめないまま、亡んでゆくものが、この世界には沢山ある気がする。

ヒトコママンガを自分が描いている時に思うのは、それほど面白いわけではないなあということだ。何だか、おきまりの技を繰り返しているだけの様な気がして仕方がない。

もう十五年以上、「木陰の物語」の新

作を毎月一本仕上げなければならないのだが、そっちは相変わらず面白いのである。

だからといって、いつもいつも傑作が出来るともなく、打席に向かって、よし！と意気込むのだが、打率はせいぜいプロ野球選手越えの五割くらいだろうか。でも、「今度こそ！」と思える度合いは、結構なものなのだ。

今回のマンガ展では、アイデアではなく、描いた絵への愛着を基準にパネル制作をした。小サイズの原画を作って、それをB全版に制作して貰ったのだが、仕上がりは未だ知らない。搬入当日、ギャラリーに届く。それを考えると、チョットうきうきするのは、アイデアではなく、絵がどんな風に来上がっているかなあというところ。

ちょうど、写真を現像に出していた頃の楽しみに近い感覚だ。

マガジンの表紙のイラストを選ぶときは、意味、意図の表示されたものを選ぶ場合と、この絵が好きだからこれに！と思う時の両者がある。そのバランスは微妙だ。7年も繰り返していると、なにか現れている事があるかもしれないが、私には分からない。

2017/03/06 団士郎